

血液像自動分析装置（DI-60）導入の効果について

◎山口 詩織¹⁾、古川 誠也¹⁾、後藤 千絵¹⁾、栗田 哲至¹⁾、福田 淳¹⁾
社会福祉法人 聖隷三方原病院¹⁾

【はじめに】血液像自動分析装置 DI-60(シスメックス株式会社)は、血液等の塗抹標本を顕微鏡に組み込まれたカメラで撮像し、コンピュータで解析及び分類を行う装置である。自動血球計数装置、塗抹標本作製装置に接続することで血液分析、標本作製、血液像鏡検まで自動化が可能となる。今回、DI-60 を導入した経緯と効果について報告する。

【導入の経緯】当院は血液像担当技師1名で、1日約90件の血液像を鏡検しており、外来患者の血液像目視結果の遅延や血液像担当者の超過勤務常態化などの問題が発生していた。それらの問題改善を目的に2015年3月に自動血球計数装置 XE-2100 を XN-9000 へ更新した際に、DI-60 を導入し、2018 年秋から血液像目視検体をすべて DI-60 で撮像する運用へと変更し、TAT の改善を含めた運用の見直しを行った。

【運用条件の変遷】2015 年導入当初は、異常細胞出現が懸念される目視指定検体と血液内科検体、異型リンパ球などの分類不能細胞の多い小児科検体については DI-60 での撮像対象外とし、それ以外の検体は DI-60 にて結果報告を行

った。しかし、導入当初の条件では血液像鏡検対象のうち DI-60 の撮像対象は半数にとどまり、思ったような TAT 改善とはならなかった。そこで、更なる TAT 改善と業務効率化を目的に 2018 年秋から DI-60 で全例を撮像する運用に変更した。

【考察】目視検体全例を DI-60 撮像対象としたことにより、1枚あたりの鏡検時間が短縮し、外来患者の血液像目視結果を診察前に報告することが可能となり、TAT が改善された。また、血液像担当者の業務負担の軽減に繋がり、導入の効果が確認された。

【まとめ】今後は DI-60 のまだ利用できていない機能を活かし、骨髓液や胸腹水の鏡検、撮像した細胞の画像を利用して血液像担当者の教育や内部精度管理にも活用することで更なる利用拡大を検討していきたい。

連絡先：053-436-1251(内線 3520)